

山室教授に訊く、教育の現場

これまでは東工大における教育のプロジェクトを紹介してきたが、実際の東工大の教育の現場ではどのような工夫がなされているのだろうか。ユニークな講義で2003年7月28日に東工大教育賞の最優秀賞を受賞された山室教授にお話を伺った。山室教授の担当されるコラムランドと歴史学を中心に山室教授の教育論を紹介しよう。

・コラムランド

コラムランドとは総合科目Aの変り種として、対象学年の1年生に限らず上級の学年からも人気のある講義だ。文章能力の向上にと受講した読者もいることだろう。この講義は6人1組のグループを作り、あるテーマに沿って誰かが書いてきたコラムに対してディスカッションを行い、評価をする。そして最後に誰が書いたのか発表する。この講義でコラムを書き、評価を受けると、いかに自分の意図が周囲に伝わっていないかを痛感するだろう。それこそが山室教授の狙いである。

山室教授がコラムランドを始めたきっかけは、理系学生の文章力を鍛える為である。理系学生が文系授業を受講するときに最も期待することは何かと考えたとき、それはリテラシーのスキルを磨くことだろう。そう思った山室教授は、まず3年生向けにこの講義を始めた。実験的な講義であったにもかかわらず講義は好評であり、受講者も年々増え続けた。そしてカリキュラム改革のとき1年生が講義の対象になり、現在の形式に至る。

理系の人間が書く文章はそのほとんどがレポートであり、それは読む相手が限定された文章であるとも言える。書く内容もある程度限定されるので、相手に誤読される可能性は少ない。しかし、不特定多数に対する文章はそうはいかない。たとえ同じ文章を書いたとしても人によって解釈の仕方が違う。むしろ違うことが当然となってくる。その違いをコラムランドを通じて体験してほしいと山室教授は考えている。



今回お話しを伺った山室 恭子 教授

・歴史学

歴史といえば小中高と学んできた人も多い馴染みのある分野であるが、やはりこの歴史学の講義も変り種である。歴史学と聞くと、時代の流れに沿って誰が、いつ、どんなことをしたのかということを知るだけの講義を思い浮かべるだろう。山室流歴史学の特徴は1話完結、半期をかけて1つの時代をじっくりやるというところにある。また、授業内容にしても既存の本や研究の切り売りではなく、自分が資料を通して様々な歴史上の人物と『会話』をした内容を元に作っている。

山室教授の本職は歴史学者である。山室教授が考える歴史学とは、現代では当たり前になっていることから『1度裸になる』ことだ。どの時代のどんな人物でもその人なりの努力をしたが為に現在、歴史にその名を残しているのである。現代の倫理に照らし合わせて歴史上の人物を善玉、悪玉に分けるのではなく、同じ人間が自分と全く違う環境でとてつもないことを成し遂げたということに思いをはせること、それが歴史を楽しむことになると山室教授はおっしゃった。専門外の分野だからこそ楽しんでもらいたい。山室教授のそんな思いから1話完結型の山室流歴史学が生まれた。

山室教授自身が自らまとめた資料を使って講義することは、生身の歴史学者たちが現実はどうい

う仕事をしているかを見せることになる。東工大生にとって全く違う分野の学問というのは、一体どういう風に考えを組み立てているのか。そのようなところを歴史学の受講者に感じてほしいと山室教授はおっしゃっている。

・東工大生はどうなるべきか

現在、日本人に足りない力としてリーダーシップや語学力が挙げられている。そうになると教育の現場へリーダーシップや語学力のある人材を育てよという声が集まり、現場もそうしようと努力する。本大学も例に漏れず、現在リーダーの育成や語学力の養成に力を入れている。しかし、そこに山室教授は首を傾げている。リーダーシップは大勢の人間に求められるものではない。それ以上にコラボレーション能力が求められるはずである。また、コラボレートする為には、英語を話す力より専門分野以外の人間にも意としたことを伝える力の方が重要である。これが山室教授の考えだ。

この先どんな場所で働くにしても、独りで仕事をするとはまずありえない。複数の人数で取り組むことがほとんどだ。複数の人数で働く場合、全体をまとめるリーダーも重要だが、もっと重要なことは一人一人、お互いが協調していくことである。会社に行けば同じ分野で学んだ者同士で働くとは限らない。理系出身と文系出身が組んで仕事をすることもあるだろう。また、研究職に就くにしても共同研究をする場合、似たような状況になるだろう。そんなときお互いが自分の専門用語でしか話せず、意思の疎通ができかったら話にな

らない。このとき、専門用語を使わずに話す能力が要求されてくるのだ。

コラムランドには文章力の向上の他に、このような能力を身につける狙いも含まれている。6人1組でディスカッションをすると、自ずとそれぞれの役割分担が決まってくる。同じ作品を読んでそれをけなす役、ほめる役といった具合だ。また、このチームは所属の類を越えて完全にランダムに選んでいるので、各人の目の付け所、思考回路はある程度ばらける。つまり仮想共同研究となるのだ。そして最終的には意見を統一しなければいけないが、その為にはお互いに異なる意見を統一するように話を進める能力が求められる。それこそがコラボレーション能力だ。

現在、東工大には様々な教育プランがある。その中の1つに類ごとにまとめて授業をするのを廃止しようという計画がある。現在のやり方では、特にサークル活動をしないう学生は他学科の友人を作りにくくなっている。教官からだけではなく、友人から多くのことを学んでほしいという願いがこの計画に込められている。そして、幅広い人脉から得られる豊富な情報こそがゆくゆくは創造力に繋がっていくのではないかと期待されている。

東工大生に望むことの最後に山室教授はこう締めくくっている。東工大生にはいい意味で期待を裏切るような学生になってほしい。期待というのは先生方がそれなりに型にはめてモノを見ているわけである。しかし、その型を破るような卒業生が現れてくれれば教育の場としては大成功である。そのためにはコラボレーション能力を活かし、小さくまとまらない人間になってほしいと。

『親の背中を見て育つ』とよく言われる。この言葉は教育の原点とも言える言葉である。職を世襲していたころは文字通り親の背中を見るだけで子供の教育というものは事足りただろう。経済が発展し、職の種類が増えてくると、それだけでは足りずに学校が必要となる。この頃から日本は欧米諸国の背中を見て育つことになる。そして現在、既存の技術を追うだけではなく、新たに産み出すための教育の必要性が叫ばれている。いわば背中を見せるだけではなく前へ押し出そうということだ。しかし、我々学生はその前段階である『背中

を見て育つ』が十分にできているだろうか。先人たちは我々を前に押し出そうと様々な努力をしてくれているが、肝心な我々がその努力に応える下準備ができていなければ、それは全て水の泡である。また、我々自身いずれは次の世代に背中を見せる立場になる。その立場になったときどうすればうまく次の世代に繋いでいけるかを今から考え出しても遅くはないはずだ。

最後になりましたが、お忙しい中我々の取材に快く応じてくださった山室教授に心よりお礼を申し上げます。
(高野 毅)